

様式3

平成18年度 傾斜的研究費(特定)(全学分)(戦略分・公募分)研究報告書

研究テーマ区分 [①都市形成に関わる研究] ②特徴ある教育プログラム開発をめざす研究]

研究課題名	江戸時代以降の環境変遷と江戸・明治期の木造大都市東京形成に関する研究	
研究者または研究代表者名	所属部局名	職位
山田昌久	都市教養学部人文社会系国際文化コース	准教授
研究分担者名	部局名・所属研究機関名	職位
小野 昭	都市教養学部人文社会系国際文化コース	教授
福田千鶴	都市教養学部人文社会系国際文化コース	助教授
畔上直樹	都市教養学部人文社会系国際文化コース	助手
福澤仁之	都市環境学部地理環境コース	教授
山田幸正	都市環境学部建築都市コース	教授
藤田香織	都市環境学部建築都市コース	准教授
研究実績の概要 (600～800字で記入。図、グラフ等は記載しないこと。)		
<p>考古・日本史の研究代表者・分担者は、江戸時代遺跡から出土した木材の製品種と樹種に関するデータベースを作成した。江戸時代の大都市江戸で使用されていた建築材には、多種類の樹種が存在し、各階層での入手方式の違いや、木材産地の資源枯渇による江戸近郊の植林や木材輸送についての検討が出来た。また、製材法の発達による径の小さい木材の利用によって、建築材の太さや木取りに変化が見られることも分かった。</p> <p>江戸時代の後半には、特に用材がスギ植林材に傾斜する部分と、適材とは言えない樹種の使用の部分があることが確認された。</p> <p>建築の研究分担者と代表者は、江戸時代の農家・商家で重要文化財に指定されている建築の使用材積と、都市の長屋建築の使用材積の比較データを収集した。都市の用材調達量の限界と居住者増による施設増設との関係を解明しようとしたものである。そこには、単位面積あたりの居住者数の違いの問題もあるので、単純な平米単位の材積率というかたちでの提示以外に考慮することも必要だと考えた。結果として床面積あたりの材積の省略と、居住者密度の増加の両方が浮かび上がった。</p> <p>2006年韓国で開催された、アジア建築学会において、本研究成果の一部を建築・考古の共同研究者の連名で発表するなど、学際的な研究成果報告も出来た。</p>		

### 様式3

研究発表 [雑誌論文発表、図書、学会発表等]			
著者 (講演者)	論文題目 (発表題目)	発表誌 (発表大会名)	年月
山田昌久	遺跡発見の植物と技術情報から見た人と森の関係史	人類時代の植生史研究と考古植物学 -旧石器から江戸へ 日本植生史学会2006年度大会、	2006年11月
山田昌久	弥生時代以降における大径材利用システム	日本建築学会構築部会例会	2006年12月
山田昌久	21世紀の木質遺物研究は既存の考古学を超えていく	『木の文化と考古学』大阪文化財センター	2007年2月
SATO Hitomi, FUJUTA Kaori, YAMADA Yukimasa, and YAMADA Masahisa	Study on the Dynamic Characteristics of Traditional Timber Farmhouses in Mountainous Districts of Japan	The 6th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia	2006年10月
山田昌久		『人類史集報2005』首都大学東京考古学報告11	2007年3月
Yukimasa YAMADA, TRAN Thi Que Ha	A Typological Study on the Timber Frame Structures of Traditional Farmhouses in Vietnam -Based on the Results of a Nationwide Survey between 1997 and 2002	Proceeding of the 6th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia	2006年10月